令和７年度第３回（第 13 期第２回）さいたま市社会教育委員会議　会議録

開催日時：令和８年１月 20 日（火）10 時 00 分～11 時 40 分
開催場所：消防庁舎３階関係課会議室
出席者名：【委　員】梶野　光信議長、石川　敬史副議長、岩城　明子委員、
蝦名　るみ子委員、小林　玲子委員、澁谷　知範委員、
関根　広美委員、田中　亜弓委員、鶴ヶ谷　柊子委員、
野津　美智代委員、橋本　洋光委員、矢作　修一委員、
吉川　洋一委員、和田　洋樹委員
【事務局】（生涯学習部）　深津　健太郎
（生涯学習振興課）八島　典子、玉城　伸、山本　直子、
三村　悟、伊藤　智美、駒井　友里香
欠席者名：　石﨑　敬吾委員
公開・非公開の別：公開
傍聴人の数：なし

１　開　　会

２　挨　　拶

３　議　　事

⑴　前回会議について

令和７年度第２回会議の概要について、会議録に基づき説明した。

⑵　さいたま市社会教育委員会議への諮問について

梶野議長へ生涯学習部長より諮問書を手交した。

⑶　ワークショップ

「さいたま市生涯学習ビジョン」の振返りを行い、次期「さいたま市生涯学習ビジョン」に取り上げたい視点等についてグループごとに話し合いを行った。

（ア）　グループワーク

＜Ａグループ（発表者：和田委員）＞

社会全体を見渡すと、これまで生涯学習は主に 70 歳以降の「余生をいかに楽しく過ごすか」という観点で捉えられてきた。しかし現実には、70 歳を過ぎても働いて生活を維持しなければならない状況が増えており、「生きるための生涯学習」という視点が新たに求められていると感じている。また、PTA 会長という立場からは、若い保護者たちがどのように生涯学習へ関わっていくのかという課題があり、人生のそれぞれのステージにおいて、生涯学習がどのような意味を持つのかを示す「羅針盤」や「地図」のようなものが必要ではないかという問題意識もある。

さらに、現在の70歳の方々が子どもの頃に学校教育で学んだ内容は、現代の教育とは大きく異なる。そのため、高齢になってから新たに学ぶ際には、これまでの知識をいったん手放す「アンラーニング」の視点も前提として必要なのではないかと考えている。

一方で、地域社会の現場では、自治会やPTA、青少年育成組織など、住民が主体となって運営する様々な団体があるものの、住民だけで担うには限界もある。企業で働く人たちも地域で長い時間を過ごしていることを考えると、そうした人たちも住民の一員と捉えるべきであり、地域に根ざした「エリア型コミュニティ」と、企業などを軸にした「テーマ型コミュニティ」とを融合させることが必要だと感じている。この両者を結びつけ、取組を進めていくためには、コーディネーターの存在が重要ではないかという指摘もあった。

また、地域の中には世代横断型のコミュニティカフェのような、多様な人が気軽に関われる場所があると良いという意見も出た。生涯学習の内容は非常に幅広く、現代ではICTの発達によって自分で好きなものを選べる一方、そもそも興味があるだけで選ばない人も多い。そうした中で、「参加してみたら楽しかった」というような、偶然の出会いを演出する仕組みが大切ではないかという話もあった。公民館でも、館長がギター好きであることをきっかけに自然発生的に歌の会が生まれる、といった例があり、何かを組織的に作り上げるのではなく、集まった人たちで自然に活動が生まれるような「緩やかなつながり」が価値を持つのではないかという意見があった。

＜Ｂグループ（発表者：関根委員）＞

多くの意見というよりも、まず「この立派なビジョンが市民に十分に伝わっていないのではないか」という問題意識が大きく共有された。そのため、生涯学習やリカレント教育について、どのような取組があり、それによってどのような成果や幸福感が生まれたのかといった「具体的な情報」を、もっと分かりやすく発信していく必要があるのではないかという意見が出た。

情報発信の手段としては、市報が依然として有力で、申込みの多くが市報経由であることもあり、まずは市報を積極的に活用し、生涯学習の内容を具体的に伝えていくことが重要だという指摘があった。また、公民館や小規模コミュニティでの取組を、統一的に見える形で発信できるような工夫も必要ではないかという意見があった。例えば「さいコイン」のようなポイント制度を活用し、トータル的に学ぶことのメリットを示すという案も挙がった。

さらに、さいたま市には10の区があるので、ビジョンが大きく抽象的でつかみづらいという課題も指摘された。そこで、各区の特色や地域資源を活かし、住民同士がつながっていけるような「小さなコミュニティ」を起点に、より大きなコミュニティへ広げていく必要があるという意見が出た。そのためには、地域全体を見渡しながら、小さなつながりを大きなつながりへと結びつけていくコーディネーターの役割が非常に重要であると考えられる。

また、多世代が共存する地域において、子どもたちが成長の過程で学んだことを次

の段階へつなぎ、将来さいたま市の中で自分がどのように活躍できるかを考えるような仕掛けも大切であるという意見もあった。これもまた、コーディネーターの力が必要とされる部分である。

結局のところ、良い取組や良い点は多く存在するのに、それらが十分につながっておらず広がっていないことが現状の課題であるという認識が共有された。今回作り上げた素晴らしいビジョンを、市民に分かりやすく落とし込み、参加しやすい形にし、一人ひとりの幸福度を高めていけるような仕組みにしていくことが重要である、という意見でまとめられた。

＜Ｃグループ（発表者：橋本委員）＞

まず従来の生涯学習の三本柱である「人づくり」「つながりづくり」「まちづくり」について議論が行われ、これらは基本的には一定程度実践されているのではないか、という認識が共有された。そのため、現状と大きく合わない点は多くないという意見があった。

一方で、新たに加えるべき視点として多くの意見が出された。具体的には、障害のある子どもや大人、外国人、市内に増えている不登校の子どもたちなど、多様な背景を持つ人々がさいたま市に住んでいる現状を踏まえ、これまで地域にいた人たちだけでなく、新たに地域に加わってくる人たちも含め、誰もが参加できるつながりづくりが必要だという指摘である。こうしたつながりづくりを通じて、地域づくりやまちづくりへと発展していくことが重要だと議論された。

その上で問題となるのは、「誰がつなぎ役を担うのか」という点である。Ｂグループでも触れられていたように、つなぐ人＝コーディネーターの存在が極めて重要であり、コーディネーターやボランティアを育成していく必要があるという意見が強く示された。若い世代にも積極的に参加してほしいという願いも込められている。

さいたま市民大学では、コーディネーター養成講座やボランティア育成講座を実施した年もあるから、再び展開していくことも一つの方法ではないかという意見が出た。また、地域では協働活動の広がりや大学生ボランティアの増加など、参加意欲を持つ層は着実に増えている。さらに、社会人でも、限られた時間を生かして専門性を提供する「プロボノ」に参加する人たちが多く存在し、ネットを通じて地域につながる動きもあるという具体例が紹介された。

公民館もコーディネートの一端を担い得るものの、現場の負担は大きく、すぐに十分な役割を果たすのが難しい側面もあるという指摘があった。それでも、多様な人々が参加できる地域をつくるためには、コーディネート機能をどのように育て、地域に根づかせていくかが、新たに加えるべき重要な要素であるという結論に至った。

（イ） 本日のまとめ

＜石川副議長＞

３班の発表を拝聴し、全体を通して２つの点が特に印象に残った。まず一つ目は、Ａ班の議論で出てきた「学びの羅針盤」や「学びの地図」という考え方である。Ｂ班でも触れられたが、ビジョンは５年のスパンで策定されるものであり、その間に小学生は高学年に、中学生は高校生へと進み、社会人も就職・退職・再雇用など人生のステージが大きく変化する。そうした一人ひとりの長い人生、経験、時間軸の中で、連続的な学びのストーリーを広く周知することが必要ではないかと感じた。

二つ目は、Ｃ班の付箋にあった「地元学」というキーワードにも関連するが、学びが個人の中で完結するだけでなく、点が線になり、線が面になって広がっていく過程で、そこをうまく整理し、つないでいく役割を担う存在、すなわちコーディネーターの重要性である。リカレント教育において個々の学びがつながり、地域に広がり、より大きな力となるよう「料理してくれる」存在が不可欠だと感じた。

また、さいたま市は行政区域が広く、それぞれの地域に独自性がある。そのローカルな特色を活かしながらも、最終的には一つにつながっていくような方向性で取組を進めていくことが望ましいのではないかと思った。

＜梶野議長＞

生涯学習ビジョンの根幹となる「生涯学習とは何か」という定義そのものを、改めて明確に打ち出す必要があると感じている。日本で生涯学習が広まった当初は、余生の楽しみや趣味教養といった文脈が強かったが、いまや 70 歳まで働くことが当たり前となり、人口減少や超高齢社会が進む現代では、生涯学習の捉え方そのものを変えていく必要がある。

その意味で、「生きるための生涯学習」という視点が欠かせない。重々しく言うつもりはないが、生活を支え、日常を豊かにし、人生をよりよく生きるための学びであるという観点をビジョンに明確に位置づけていくべきだと考えている。また、基本理念としては「地域共生社会」が重要だと感じており、インクルーシブ、ダイバーシティといった概念も踏まえながら、生涯学習の基本となる理念を構築していくことが望ましい。

次に、生きるための生涯学習という視点からは、リカレント教育を超えて、最近注目されている「リスキリング」も取り入れる価値がある。企業内研修のイメージが強いが、自治体がシングルマザー向けにリスキリング講座を実施し、生活の安定や子どもとの時間の確保、在宅での就業可能性などにつながっている例もある。こうした生活支援型のリスキリングをビジョンに含めることも検討できるだろう。

また、理念を実現するためには、エリア型コミュニティとテーマ型コミュニティをつなげることが必要になる。企業や NPO と、自治会・町会・学校・青少年育成組織などを結びつけていく取組が不可欠だ。さらに、大正大学の牧野篤氏が提唱している「小さな社会をたくさんつくる」という考え方も参考になる。顔が見える関係の中で、住民同士が支え合う小さな社会を形成することが大切であり、そのためにも、コーディネーターやファシリテーターの存在が非常に重要となる。

これらの小さな社会を支える際には、公共施設の果たす役割も大きい。特に公民館はさいたま市の特徴として挙げられており、同時に学校を核とした地域づくりを新しいビジョンの中に盛り込むこともできるのではないかと感じた。

4　連　　絡

生涯学習学びのネットワークの実施結果、第56回関東甲信越静社会教育研究大会神奈川大会の参加結果、コミュニティ・スクールシンポジウムの開催通知について報告した。

5　閉　　会

以上

Aグループ	新たな視点	時機にそぐわない点
人づくり	リスキリングの機会、場所の提供 子どもの成長によって変化していく観点 外国人の日本語学習 障害者の生涯学習	動機付け 人生のステージにあわせた生涯学習 ICTの活用 対面とデジタルのベストミックス 「新たな学び」の提供 定着している 支援臭を嫌う若者たちへのアプローチ デジタルありき 高齢者へのアプローチ 高齢者 デジタルデバイド
つながりづくり	社会教育士の活用 格差社会への取組 アプローチ 外国人の保護者へのアプローチ (障害のある人) 学校卒業後 社会とつながる つながり「作り」に活用できるICTは？ 社会教育行政と市長部局との連携 子どもの居場所のみならず、高齢者の居場所作成事業 自治会活性化 実態わからないと手を出さない（事前ググる） オンデマンド学習の場 必要なときに必要な場所で	コーディネーター ファシリテーターの育成 (どんな分野？) 自分の学びを他に享受しない楽しみもあるのではないか 人間関係を嫌う風潮 「ぐうぜん」の創出 ICT→自分で選択になりがち コミュニティを好まない風潮をどうすべきか 70歳まで働く時代にどう対応する？ 生涯学習関心をもってもらう
まちづくり	コミュニティカフェ 世代横断型 日常生活に合った形の生涯学習と推進 (地域)共生社会づくりの観点 誰もが(大人、子ども、障がい者、外国人)生涯を通じて意欲的に楽しく学び続ける社会 デジタルありきの考え方 駄菓子屋的場所 生涯学習施策に関わったことを残せるようなシステムの構築 企業との連携 さらに強く 誰一人取り残されない社会の実現 テーマ型コミュニティとの融合 従業員という「住民」の力 何をすれば？ ↓ 市が何をしてほしいか選択肢を出す	公民館の機能をどう生かすか？ 学校を拠点とした地域づくり 具体的な姿 まちづくりが可視化された経験のない人たち

Bグループ	新たな視点	時機にそぐわない点
人づくり	人の生涯 小→中→高→大人 人が生きる連続性 私事化 個別化 →共に学ぶ ・ゴミ　環境 ・防災　水害 地震 人と人を つなぐ コーディネーター	社会教育主事(士) 学芸員 司書 →共同という視点
つながりづくり	事実を見る (AI、人工知能) 現実の生活の 中からの 課題 例→移動 買い物など さいコインの さらなる活用 (生涯学習の ポイントとなる) 次に つなげていく しかけづくり 方向性1 ・最新の情報提供 ・ライフステージに 応じた学びの提供 ↪市民への提供の 方法(多様に！) 方向1 ・リカレント教育 など学び直しの場 や成果の実例を 紹介 (東京都の例) 方向2 コミュニティ スクールの充実を めざして ↓ 実践や成果・課題 改善策の共有	メディアと 市報での 市民の方への お知らせ
まちづくり	・外国ルーツ多様化 ・障害…不登校… 共に学びあうこと 知ること 小さな拠点へ ・つながり ・ネットワーク など 夜の町の 魅力アップ	ビジョンの 周知

Cグループ	新たな視点	時機にそぐわない点
人づくり	学びを通した つながりづくり 学びには他者が 必要 「ウェルビーイング」を核心的 目標として明記 社会人の学び 直しは蓄積し、 確認、証明 できる仕組み デジタルの活用 リテラシー普及 海外にルーツの ある人 その家族やこども が生涯学習の対象 となっていない ように見える	入口支援だけで なく学習成果や 活用の支援を 拡充 学び直しの場を 拡充→ ・デジタルバッジ 等の活用 ・学習歴・スキルの 可視化
つながりづくり	風と土の つながりづくり 地域の人と外 からの風と 不登校、孤立、 障害者、外国人 住民等 個別最適な つながる学び コーディネーター ボランティア 等を養成する 取り組み事例 (市の事業) こどもを持つ人は こどもを通した活動を 通してコミュニティと つながる機会がある 可能性があるが、こど もをもたない若い人は 難しい傾向がある。 世代間 ギャップ の 解消 ボランティア の育成 誰もが参加 する つながりづくり コーディネー ターの育成 若い世代の 参加	サークル中心に 加え地域の課題 や包摂につなが る学びへ
まちづくり	つながりづくり から地域づくり つながりで終わ らせない 自分がかわる 地域がかわる 地元学 (〇区学など) をつくろう 具体的目標を あえてつくる 社会教育士等 地域の学びの コーディネータ オーガナイザの 育成 コーディネーター として 「社会教育士」 の養成等の追記 気候変動が 伴う対応 障害児・者 対応	社会教育士等 地域の学びの コーディネータ オーガナイザの 育成 対面とデジタルの ベストミックス ↘ ハイブリッド型 教育 障害当事者 外国人の方への ヒアリング ニーズ把握